

# 國學院大學學術情報リポジトリ

市場原理主義への対抗軸としての宇沢思想の可能性：  
宇沢弘文とフリードマンに関する個人的メモワール

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-21 キーワード (Ja): 宇沢弘文, ケネス, アロー, シカゴ大学, ミルトン, フリードマン, 社会的共通資本 キーワード (En): 作成者: 高橋, 克秀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000039">https://doi.org/10.57529/0002000039</a>

---

# 市場原理主義への対抗軸としての宇沢思想の可能性 — 宇沢弘文とフリードマンに関する個人的メモワール —

---

■ 高橋 克秀

---

## ▶ 要 約

稀代の理論経済学者にして実践的社会思想家の宇沢弘文（1928-2014）の思想に再び脚光があたっている。「社会的共通資本」をはじめとする倫理的な経済思想が再評価され、経済団体連合会など宇沢思想とは縁遠いはずの財界エスタブリッシュメントもこれを取り入れようとしている。この背景には、いわゆる新自由主義または市場原理主義と呼ばれる現代の経済思潮が行きつくところまで行きついた結果、地球規模で所得格差と不平等が広まったことがある。20世紀後半以降、正義や分配の公正を基調とする経済思想は退潮し、市場原理主義への対抗軸はほとんど失われつつある。経済的地盤沈下の著しい日本においても人々は鬱屈した感情を蓄積しながらも現状打開のよりどころとなる思想的基盤を持ちえずに漂流している。閉塞した時代状況を打開する手がかりとして宇沢思想はいまだに有効だろうか。本稿では、まず、宇沢のよき理解者でありながら高い壁でもあったケネス・アローとの交友、対極にあったミルトン・フリードマンとの確執を通じて形成された宇沢思想の源流を激動の1960年代の米国を中心に描く。次に、宇沢思想が市場原理主義の対抗軸として現代に復権し、機能するためにはどのような条件が必要かを考えていく。

## ▶ キーワード

宇沢弘文 ケネス・アロー シカゴ大学 ミルトン・フリードマン 社会的共通資本

### 目次

#### はじめに

#### 1章 数理経済学者としての出発

##### 1節 前半生

##### 2節 スタンフォード時代

##### 3節 ケネス・アローとの別れ

##### 4節 シカゴ大学とベトナム戦争

#### 2章 宇沢のフリードマン批判

#### 3章 経団連が宇沢思想に帰依？

#### 4章 経団連による宇沢解釈の誤り

#### 5章 「社会的共通資本」再考

おわりに——個人史の中の宇沢弘文とフリードマン

## はじめに

---

20世紀後半の経済思潮を大まかに整理すれば、先進国では70年代から80年代にかけてケインズ政策が行き詰まり、小さな政府と民間活力を重視する市場原理主義が中心思潮に取って代わった。この傾向は2020年代まで続いている。この間、先進国や中国だけでなく多くの発展途上国でも経済格差と社会的格差が著しく大きくなり、一国の内部においても国家間においても階層分化が進んでいる<sup>1</sup>。その原因は慎重に検討しなければならないが、市場原理主義、新保守主義、あるいは新自由主義と呼ばれる思潮の帰結である、という解釈はひとつの有力な可能性である<sup>2</sup>。

ところで、現状において市場原理主義に対抗する統一的な思想基盤はほとんど存在しないか、あるいは脆弱である。人々は鬱屈した感情を蓄積しながらも現状打開へのよりどころとなる基盤を持ちえずに漂流している。たしかに、ポスト・ケインジアン<sup>3</sup>の経済学、近年はウォール街のデモ、ピケティの格差論、マルクスのエコロジー的解釈、グローバル・タックスの部分的実現、気候変動への取り組みなど重要な対抗運動は始まっている。しかし、こうした運動にもかかわらず新保守主義の岩盤は固く、新保守主義がポピュリズムと結合したトランプ主義のような強烈な変異種まで発生している。さらに世界に蔓延し始めた反知性主義が良質な言説を受け入れる土壌を侵食している<sup>3</sup>。

本稿の目的は、対抗思想のひとつの可能性として宇沢弘文（1928-2014）の社会経済思想を再検討することである。宇沢弘文は50～60年代の米国で理論経済学の最高峰のひとりとして名を馳せた。しかし、68年の帰国後はベトナム反戦運動、水俣病、公害問題、成田空港、地球温暖化、教育問題などさまざまな課題に対して実践家として行動範囲を広

---

1 ピケティによれば、近代資本主義経済においては、資本からの収益率( $r$ )が賃金上昇率( $w$ )を常に上回る傾向がある。このため歴史的には格差の拡大こそが資本主義の常態である。格差が縮小するのは戦争や大恐慌など例外的なケースである。

2 市場原理主義と新保守主義、新自由主義という用語の定義は一定していないうえに境界は曖昧である。これらの思潮の共通部分は、選択の自由を強調し、政府の介入や規制を極度に嫌悪するところにあるが、論壇・ジャーナリズムでの用法は混乱している。宇沢がどのようにネオリベリズムと市場原理主義を理解していたかについては、第4章で述べる。

3 知識人はなぜ影響力を失ったのか、これは大きな検討課題である。憲法学者で代表的なリベラル派知識人の樋口陽一は次のように述懐している。「知識人と社会そのものの雰囲気との間のへだたり、それこそが問題」、「専門分野の研究者としてやってきた自分自身の営みが、届くべきところに届いてこなかったという無力さを恥じる気持ちを、抑えることができません」（『リベラル・デモクラシーの現在』（岩波新書、2020年））。

げていった。その思想的帰結は人々を幸福にする経済と経済学の実現である。宇沢が追求した倫理的経済学は、フリードマン思想が世界的に優勢な今日、対抗運動の理論的・精神的支柱となりうるのだろうか。

本稿では、まず、宇沢思想の形成過程を50～60年代の米国の社会状況の中に探る。宇沢がスタンフォード大学のケネス・アロー（1921-2017）など最高峰の経済学者と交流するなかで独自の思想を育てていく過程をみる。とくに注目するのはケネス・アローおよびミルトン・フリードマン（1912-2006）との関係である。ケネス・アローは日本で定職のなかった宇沢の天才性を見抜き、56年に破格の待遇でスタンフォードに招いた恩人である。

一方で宇沢とフリードマンの思想は水と油のように相容れない。しかし、ふたりはシカゴ大学の同僚であった時期がある。宇沢は居心地の良いスタンフォードを離れ、64年にあえて市場原理主義の守護神の牙城に飛び込んだ。その決断の背後に何があったのか。フリードマンやシカゴ派経済学と直に接触して何を感じたのだろうか。おそらくは強烈な反作用が働いて、シカゴ学派とは逆方向の宇沢思想の骨格を形成する契機になったのではないか、というのが本稿の緩やかな問題設定である。

なお、本稿は文献資料を参照するだけでなく、筆者が関係者から得た証言や自身が経験したエピソードを織り込み、個人史と関連させながら宇沢とフリードマンを語るスタイルとしたい。このため本稿は厳密な意味での論文ではなく、経済ジャーナリストのメモワールを兼ねた研究ノートである。

## 1章 数理経済学者としての出発

---

### 1節 前半生

---

宇沢弘文は1928年（昭和3年）に現在の鳥取県米子市に生まれた。父は教育者であった。宇沢が3歳のころ東京に移住する。宇沢は昭和20年に東京府立第一中学校を卒業し、第一高等学校（旧制一高）に進学してラグビーに没頭した。このあとラグビーは宇沢の人生に影響を与える<sup>4</sup>。

---

4 一高時代の宇沢は当初、医師を志してドイツ語を学んだ。ゲーテが宰相の時に国王の独占物であった芸術作品や学問、庭園を国民の共有財産として開放したことに深く感動した。後年の社会的共通資本の考え方はゲーテを参考にしているという（『経済と人間の旅』28頁）

昭和23年に東大理学部数学科に入学し、在学中にマルクス主義の影響を受けて社会問題に関心を深める。抽象的な数学から実践の学としての経済学への転向を志してマルクス経済学を学習した。そのきっかけは河上肇の『貧乏物語』であったという。しかし、社会主義やマルクス思想に共感はしても、マルクス経済学には手ごたえを感じることができずに途方に暮れた。宇沢は数学者として将来を嘱望され、特別研究生の身分で大学に残っていた。しかし、戦後の大混乱期に数学のような貴族的な学問をやっていることに自責の念を感じ、恩師の制止を振り切って大学を辞めてしまう。

八方塞がりの状況の中で、数学科でもラグビー部でも先輩にあたる稲田献一（1924-2002）と小田急の車内で偶然に再会する<sup>5</sup>。宇沢はすでに経済学に転向していた稲田から数学を駆使する新古典派経済学の手ほどきを受けて開眼する<sup>6</sup>。

宇沢にとって稲田は恩人である。世界最高峰の社会学者ケネス・アロー（1921-2017）との出会いのきっかけをつくってくれた。宇沢は稲田の指導によってアローの論文を読み、20代後半からの遅いスタートであったにもかかわらず理論の最前線に追いつくことができたのである<sup>7</sup>。

とはいえ、知識量だけをみればまだまだ経済学の初心者である。そのような状況でアローに送った論文に対して思いもかけない速さで返信が来たのは昭和30年（1955年）のことである。その返信はアローの助手に採用するという望外の知らせであった<sup>8</sup>。ケネス・アローが20世紀最大の理論経済学者であることは衆目の一致するところである。その足跡は経済学にとどまらず社会科学全般に及んでいる。1972年には当時の最年少としてノーベル経済学賞を受賞している。そのアローに認められた宇沢が欣喜雀躍として渡米したことは想像に難くない。

#### 【個人史のエピソード】 尊敬されていたウザワとイナダ

宇沢の経済理論を具体的に意識したのは、1990年にコーネル大学大学院に留学した時のことである。日本でも宇沢の令名はもちろん聞いていたが、難解な数理経済学者という先入主を持っていた。当時、私は日本経済新聞社から傘下の社団法人・日本経済研究セン

5 稲田は宇沢に先んじて数学から経済学へ転じ、早くから海外で高く評価された。都立大、阪大教授を務めた。宇沢との共著に『現代経済学5 経済発展と変動』（岩波書店、1972年）がある。

6 当時の日本はマルクス経済学の全盛時代であり、数学を使う新古典派経済学（近代経済学）の研究者は極めて少数だった。このため稲田や宇沢のように数学的素養があることは大きなアドバンテージとなった。

7 宇沢にケインズ『一般理論』の手ほどきをしたのは、館龍一郎（1921-2012）であった。

8 このエピソードは、インドの独学の天才数学者ラジャスマンがケンブリッジのハーディ教授に送った論文で才能を見出され、英国に招聘された故事を思い出させる。

ターに研究員として出向していた。運よく社費留学生になり、米国経済学の動向を調査すべしとの辞令を受けた。7月にニューヨーク州イサカに着き、英語の補習コースに通いながらさわやかな夏を楽しんだ。9月になって Macro Economics の授業に出席した。担当のカール・シェル (Karl Shell) 教授は毎回のようにウザワの二部門成長モデルとイナダの条件 (Inada Condition) について言及した。興に乗ると、「ウザワとイナダは兄弟のように仲が良く、相撲レスラーのように立派な体格のラグーマンであり、経済学でもラグビーでも巨人なのだ」と話が弾み、シェルが心からウザワとイナダに敬意をもっていることが伝わってきた<sup>9</sup>。イナダとは前述の稲田献一のことである。東大数学科で宇沢の3年先輩にあたり、宇沢が数学から経済学に転向するときにメンターの役割を果たした。稲田は都立大、阪大教授を務め、数理経済学者として世界的業績を残した<sup>10</sup>。そしてカール・シェルは宇沢のシカゴ大学時代の直弟子であり、後年、宇沢に対して学説史上きわめて重要なインタビューをしている (3節で述べる)<sup>11</sup>。

## 2 節 スタンフォード時代

---

56年から宇沢はカリフォルニアの地で快進撃を始めた。宇沢の能力もさることながら、アローが世界中でただひとり選んだ助手という立場によっても一目置かれたに違いない。宇沢はアローの期待を上回る画期的な論文を量産した。数理計画法、消費者の顕示選好、一般均衡理論の存在と安定、中立的技術進歩の理論、二部門成長モデル、最適成長論、内生的経済成長論で世界的な業績をあげた<sup>12</sup>。

同時に教育者としても優れ、次世代の多くのスター学者を育てた。ジョセフ・スティグリッツとジョージ・アカロフはノーベル賞を受賞した。理論経済学の重鎮デヴィッド・キヤス、カール・シェル、ミゲル・シドラウスキー、青木昌彦も指導を受けた<sup>13</sup>。このほか

9 カール・シェルは米国の大学教員には珍しく授業中もスーツを着ていた。授業中にときおりフランス語で説明をすることに面食らった。

10 Micro Economics の授業では高山昂 (1931-1996) の *Mathematical Economics* (Cambridge University Press, 1985) が必読文献とされていた。1970年代までは安井琢磨、二階堂副包、森嶋道夫、置塩信雄など理論経済学における日本人学者の貢献は非常に大きかった。

11 ケインズ『一般理論』の形成過程についても言及している。

12 これらの業績のうち、宇沢自身は二部門成長モデルを筆頭に挙げている。二部門とは消費財を作る部門と投資財を作る部門で、マルクスの資本蓄積の理論を数学的モデルにまとめたものである (『経済と人間の旅』58頁)。

13 経済学者の岩井克人が『経済学の宇宙』(日本経済新聞出版本部, 2021年)でこれらの名前を挙げている。岩井は宇沢が帰国後の東大経済学部で指導を受けた。

間接的に影響を受けた人物は枚挙にいとまがない。台湾の総統を務めた李登輝（1923-2020）は1960年代半ばにコーネル大学に留学していた。農業経済を専攻していた李登輝は宇沢の二部門モデルを使って優秀な博士論文を書いた。これをきっかけに二人は親交を深めることになり、後年、李登輝が総統になった時には自宅に招かれるほどの関係になる。

このように抜群の業績を挙げ、多くの人材を養成してひとつの学派をなした宇沢はノーベル賞の有力候補であった。米国に留まっていれば10年以内に受賞したとみられている。しかし、そうならなかったのは、宇沢の劇的な思想的転回が関係している。宇沢は学問的には栄光に包まれていたが、ベトナム反戦運動で同僚や学生が逮捕されていくなかで痛烈な米国批判に転じる。同時に自らの学問の存立基盤であった新古典派経済学に強い疑念を感じるようになっていく。

### 3節 アローとの別れ

---

宇沢が渡米した1950年代、米国ではマッカーシー旋風が吹き荒れ大学にもその影響が及んでいた。研究面では順調であった宇沢だが、もともと社会主義にシンパシーを感じていた宇沢にとって、米国の深刻な内情を知るにつれて苦悩が深くなった。宇沢が指導していた学生が行方不明になり、反戦思想を隠さない宇沢の身边にもFBIの影がちらつくようになっていた。裕福で保守的なスタンフォードの雰囲気違和感をおぼえるようになっていく。

1964年、宇沢は順風満帆に見えたスタンフォードの生活を切り上げて、宿敵フリードマンの牙城シカゴ大学へ移る決断をする。これは学界を震撼させた。宇沢を裏切り者と面罵するものもいた<sup>14</sup>。恩師のアローも大いに落胆したと伝えられている。すでに宇沢の存在はそこまで大きくなっていった。この決断の背景にはなにがあったのか。

宇沢の生涯を概観するために重要な書籍が2冊ある。ひとつは宇沢の『経済と人間の旅』（日本経済新聞出版社、2014年）である。『経済と人間の旅』は2002年に宇沢が日本経済新聞に連載した自伝「私の履歴書」を再録したものである。

2冊目は佐々木実氏の『資本主義と闘った男』（講談社 2019年）である。これは、宇沢弘文の本格的な評伝である。600ページを超える大作で、本人への密着取材と関係者への入念な周辺取材によって巨人の全体像に迫った力作である。

---

14 これはイェール大学教授のチャリング・クープマンズ（1910-1985、1975年にノーベル賞受賞）である。クープマンズはシカゴ大学時代にいた当時からフリードマンと敵対関係にあった。クープマンズによれば、フリードマンは政治的な目的のためにデータを改ざんしていたという。

スタンフォードを去ってシカゴに行った経緯について、「私の履歴書」は素っ気なく「私はアロー教授の下にいることにしだいに窮屈さを感じていた」と記すのみである<sup>15</sup>。当時の複雑な心情を表現するには新聞の紙幅がたらず、関係者の詮索を避けるためにあえて1行で済ませた印象がある。

佐々木氏の『資本主義と闘った男』はもう一步踏み込んだ宇沢の気持ちを引用している。「アロー教授との関係はとても親密だったし、たいへん実りの多いものでもあった。けれども一方で、私は次第に、学問的にも人間的にも、アロー教授の存在に圧倒されるような気持ちを抱き始めてもいた。私は、私自身のアイデンティティを確立するために、彼のもとから去らなければならなかったのである」<sup>16</sup>。ここには7歳年上の知の巨人に対峙しようともがきながら重圧に苦しんだ宇沢の姿が見える。

じつは上の二つの書籍には言及がなく、参考文献にもあがっていないが見逃せないきわめて重要な文献がある。

*An Interview with Hirohumi Uzawa*, *Macroeconomic Dynamics*, 13 (2009), 390-429 である。インタビューしたのは宇沢のシカゴ時代の弟子でコーネル大学教授のカール・シェル (Karl Shell) である<sup>17</sup>。この中で宇沢はスタンフォードからシカゴに移った当時の心境を吐露している。

まず、宇沢はスタンフォードのあるパル・アルトが平和で保守的な金持ちばかりの特別な町であることに対して居心地の悪さを感じるようになったという。しかし、重要なポイントは次である。

「もうひとつの理由があります。ケネス・アローから受ける影響があまりに大きく、重くなっていたことです。彼の前では私の存在はちっぽけなものにすぎませんでした。私は私自身の存在を取り戻す必要を感じたのです。アローと研究を始めた当初、私は自由でした。しかし、アローといっしょに研究すればするほど彼の知的能力、人としての魅力、広い社会的関心に魅入られてしまったのです。彼といっしょにいと、いつも自分が小さいことを意識させられました。自分ではどうすることもできず、私は彼を模倣せざるを得ませんでした。アローは経済学だけでなく、歴史と哲学についても膨大な知識をもっていました。これほど多くの分野で深い知識をどうやって蓄積したのか見当が付きません。頭の回転もすばらしく速く、議論を始めるとすぐに問題の核心に到達してしまいます。同時に

15 『経済と人間の旅』62ページ

16 『資本主義と闘った男』226ページ 引用部分は *The Makers of Modern Economics vol. IV* から佐々木氏が翻訳。

17 カール・シェル (1938-) はスタンフォードでアローと宇沢の指導を受け、二人をもっともよく知る人物である。

アローは魅力的で人を引き付ける人柄であって、これほど大きな人物を見たことはありません」と率直に語っている。アローは宇沢が日本に帰った後もスタンフォードに戻るように何度も手紙を書いている。

#### 【個人史のエピソード】 コーヒーを入れてくれたケネス・アロー

2000年、ジャーナリストとしてアローにインタビューすることができた。取材前には、はたして学界の最高権威のアポイントが簡単に取れるのかどうか不安だった。出始めたばかりのインターネットでためしにメールするとすぐにOKの返事が来たのには驚いた。スタンフォードの研究室で会ったアローは上品で温厚で気さくな小柄な紳士であった。当時80歳だったはずである。研究室には毎日来ていると笑いながら、ノーベル賞学者が私にコーヒーを入れてくれたのには感激した。宇沢が魅了されたアローの人柄を垣間見た。

### 4節 シカゴ大学とベトナム戦争

---

宇沢をシカゴに招聘したのは、ロイド・メッツラー（1913-1980）である。メッツラーはシカゴ大学に居ながらケインジアンの孤塁を守っていたが、健康状態が悪化したので後任を探していたところだった。しかし、宇沢はシカゴからの誘いにすぐに乗ったわけではなかった。

前述のシェルのインタビューによると、宇沢はシカゴからの招聘が来た時に、フリードマンのことが気がかりで、一切かわりを持ちたくないと考えていたという。スタンフォードまで勧誘にやってきたメッツラーに対して宇沢は聞いた。

「あなたとフリードマンとの関係はどうなっているんだ？」

「フリードマンとはうまくやっているよ。彼が何を言おうと一切、気にしないようにしているからね」

メッツラーにはどうしても宇沢を獲得しなければならない学内事情があった。メッツラーのポストは俗にhouse Keynesianと呼ばれるケインズ派の指定席であり、マネタリストが圧倒的なシカゴ大学の中では異色のポストであった。メッツラーは業績抜群の宇沢を後任にしてケインジアンの砦を守ろうとしたのであった。

シカゴに赴任した宇沢は全米の大学から優秀な大学院生を選抜して特別セミナーを始めた。ここからは多くの優秀なエコノミストが巣立っていった。しかし、次第にベトナム戦

争が米国社会に暗い影を落とし、宇沢は米国社会の矛盾と亀裂に深く懊悩するようになっていく。

宇沢とフリードマンはどのような関係だったのか。ロバート・ソロー（1924- 87年ノーベル賞受賞）に取材した佐々木実によると、宇沢は親しい関係にあったソローに対してはしばしばフリードマン批判を口にしていたようである。批判のポイントはフリードマンの理論が経済学の進歩には結びついていないこと、マネタリズムを受け入れるように学生を誘導していることであった。これに対してソローは、フリードマンについて話すのは時間の無駄だから無視するようにアドバイスしたという。60年代には米国東部のケインジアンにとってフリードマンは目障りな異端でしかなく、まともに議論する相手ではないと考えられていたことがうかがわれる。

実際のところ、マネタリズムは古色蒼然とした理論とみなされ、理論家の間では一段低い扱いをされていた。フリードマンも学者としては二流で、たんなる共和党のアジテーターとみる向きも多かった。宇沢はフリードマンの政治的危険性を敏感に察知していたが、東部の主流派ケインジアンはフリードマンをキワモノ扱いして軽視していたものと思われる<sup>18</sup>。しかし、このあとわずか10年で攻守が逆転し、フリードマン主義と合理的期待形成理論が世界を席卷し、ケインジアンが完膚なきまでに叩きのめされるとは多くの人の想像力の範囲外であった<sup>19</sup>。

66年秋、宇沢はフランク・ハーン（1925-2013）の招きに応じて1年間英国ケンブリッジに滞在した。この間にベトナム戦争はさらに激化しており、シカゴに戻った宇沢は反戦運動の大きな高まりを目の当たりにした。「アジアの小国が軍事大国のアメリカによって侵略されているとき、自らの選択でアメリカにとどまってよいのかと自責の念に駆られた」宇沢は帰国を決意する<sup>20</sup>。

### 【個人史のエピソード】 ビールが大好きだったウザワ

日本がバブルの絶頂を迎えようとしていた80年代終盤、企業も政府も新聞社も海外から著名な学者を招いて派手な講演会を開いていた。MITのルーディガー・ドーンブシュ

18 フリードマン思想が70年代以降、世界的に広まっていく原因と経緯は別途検討すべき大きな課題である。日本における本格的なフリードマン受容は80年に『選択の自由』（西山千明訳、日本経済新聞社）が出版されたのがきっかけである。当時の閉塞した経済状況や国鉄労組のストライキ、電電公社の非効率など国営企業の独占や政府の規制に対する市民の不満を背景に予想を超えるブームになった。

19 このあと、理論でもシカゴ大学やミネソタ大学から始まった合理的期待学派が全米で隆盛を極め、ケインズ経済学は時代遅れの烙印を押されることになる。

20 『経済と人間の旅』62頁

教授（1942-2002）もそのひとり。国際金融論の専門家でユーモアとウィットに富んだドイツ人であった。

取材の後に東京証券会館（茅場町）のレストランで雑談をした。フランス料理をオーダーしようとする、カレーライスにしてくれと言う。聞けば、夕方にスタンレー・フィッシャー（1943-）<sup>21</sup>と共著の改定作業をするのでワインは遠慮しておくという。

—東京は今、輝いているね。世紀末のウィーンのような。世界から人を引き付けている。

僕とフィッシャーの研究室はMITでは隣同士だけど、会えるのは東京だ。

—ところでエコノミストの役割とは何ですか。

—デンティスト。歯医者のように経済の悪いところを見つけて治すことが仕事だよ。日本でいちばん尊敬されているエコノミストは誰かな？

—ウザワです。

—彼は私の先生だよ。

—いちばん有能な若手は誰かな？

—ウエダです<sup>22</sup>。

—彼は私の学生だよ。

—ウザワはどんな先生でしたか？

—僕はドイツの田舎に生まれて、大学はジュネーブに行った。でもヨーロッパの経済学は遅れているような気がして、最先端の勉強がしたかった。だからシカゴのウザワのところへ行っただ。厳しい先生だったけど学生の長所を見抜くのがうまかった。とても感謝しているよ。

—毎晩いっしょに飲んでいたという話ですが。

—そう。ウザワはだれよりもビールが好きでだれよりも強かった。

別れ際に、ドーンブッシュは来日記念で出版された自書の日本語版を取り出して私に聞いた。

—さっきの講演会での質問のことだ。この部分がよくわからないという質問が出たよね。けれど、僕は日本語が読めない。君はどう思う？

---

21 スタンレー・フィッシャー（Stanley Fisher）は世界銀行チーフエコノミスト、イスラエル中央銀行総裁を務めた。ドーンブッシュとはシカゴ大学、マサチューセッツ工科大学の同僚であった。

22 植田和男（1951-）は東大経済学部教授、日本銀行政策審議委員を務めた。ドーンブッシュのMIT時代の学生である。

たしかにその部分は日本語として不自然で誤訳かどうか微妙なライン上にあった。もし改訂版を出す機会があれば直したほうがいいと感じた。しかし、私はこの快活なドイツ人を困惑させたくないという不思議な感情に支配され、誤りだと言い切ることに躊躇した。

——大丈夫です。意味は通じてます。

ドーンブッシュはにっこり笑ってその本にサインをしてくれた。これでよかったのかどうか。彼はノーベル賞の有力候補と言われながら 2002 年にガンで亡くなった。

## 第 2 章 宇沢のフリードマン批判

---

後年になって宇沢はフリードマンを厳しく批判するようになる。ここで重要なのはハイエクとナイトを原点とするモンペルラン・ソサエティのネオリベラリズムとフリードマン流の市場原理主義をはっきりと区別したうえでフリードマンを批判していることである。宇沢は次のように言う。「ネオリベラリズムは、私たちが理解できる思想の一つの流れで、その評価についてはさまざまな議論があるにせよ、重要な考え方だと思います。ところが市場原理主義はそれをはるかに超えていて、儲けるために何でもやる、それを阻止するものがあれば水素爆弾を使ってもいい、そういうことをフリードマンは繰り返し主張していました」<sup>23</sup>。

現代の日本のジャーナリズムや論壇において、新自由主義は行き過ぎた市場原理主義による格差と貧困の元凶として批判されることが多い。しかし、この場合の「新自由主義」は論者によって中身が違ふことが多く、議論が混乱している。さらに新自由主義は、そのあいまいさゆえに経済学の学術用語としては使われなくなった。この点で藤本龍児氏の『ポストアメリカニズムの世紀』は有効な整理をしている<sup>24</sup>。

同書の第 5 章「ネオリベラリズムと福音派」は 1930 年代にさかのぼって新自由主義の来歴を説き起こす。もともとハイエクなどオーストリア学派は計画経済を徹底的に批判すると同時に、行き過ぎた自由放任にも警鐘を鳴らすという意味で「新・自由主義」を唱えていたという。これは全体主義と市場独占の両方を同時に回避する構想であり、自由な競

23 宇沢弘文『経済学は人びとを幸福にできるか』（東洋経済新報社 2013 年）66 頁

24 藤本龍児『ポストアメリカニズムの世紀』（筑摩書房 2021 年）166 頁

争条件の確保のためには国家の介入を容認するものであった。ところが、70年代に入るとフリードマンに代表されるシカゴ学派は自由放任の側面を強く打ち出した。ここには大きな政府をもたらしたケインズ政策への批判であると同時に、社会主義陣営への対抗軸という政治的意味があった。レーガンやサッチャーが徹底して小さな政府を志向すると、その影響は燎原の火のように世界に広がった。

藤本の分析によれば、新自由主義の背後にあるのはアメリカ固有の歴史的価値観やエートスである。新自由主義者には、個人の自由や市場競争の効率性は普遍的に受け入れられるはずだという思い込みがある。それはある種の宗教性に支えられている。なかでも注目されるのは福音派と呼ばれる人たちの動向だ。この中にも多くのセクトがあって内実は複雑だが一般的にはキリスト教保守派のことである。福音派は70年代から現実の政治にコミットし、大統領選にも大きな影響を与えてきた。

宗教と経済の関わりといえば、近代資本主義はプロテスタンティズムの倫理と親和性をもつとするウェーバーの議論が有名だが、藤本の議論はハイデガーをよりどころにする読み解きが斬新だ。ハイデガーは、アメリカ自身が強調する独自文明と政治理念、軍事、技術、経済の偉大性の総体としてのアメリカニズムの中に、キリスト教が混入していることを見抜いていたという。ハイデガーの思索を推し進めていくと、新自由主義の精神は福音派の労働倫理、さらにはユダヤ・キリスト教的な創造の思想と親和性をもつことになる。こうして新自由主義の淵源は、近代資本主義のはるか以前の西洋の知の形式にある、という目の覚めるような推論が生み出される。「アメリカが技術大国であるのはアメリカが宗教大国であるからこそ」というスリリングな結論に耳を傾けたい。

### 【個人史のエピソード】 中国で受容されたフリードマン

新聞記者になろうと早稲田に入った。本当は文学部に行きたかったのだが、親父から「文学のような道楽に授業料は出さない」と宣言され、やむなく政経に入った。経済学の授業は退屈だった。教員が大昔のノートを見ながらボソボソとつぶやく授業ばかりなのですぐに見切りをつけた。自然と足は文学部のキャンパスに向かっていた。東洋史と東洋思想の授業を勝手聴講し、図書館と古本屋に入り浸った。念願かなって、1980年夏に大学の訪中団に入れてもらった。当時は個人の中国旅行は簡単ではなかった。文化大革命が終わって4年後である。中国の主席は毛沢東派の華国鋒であった。

初めて見る中国は衝撃だった。空港からホテルへ向かうバスが自転車と人民服の群集のみ込まれて動かない。毛沢東の言う「人民の海」とはこのことかと思い知った。上海から一步出ると崩れかけたレンガの家に裸足の子供たち。観光地では土産物売りが押し寄せてくる。冷蔵庫はないのでビールは生温かい。トイレにはドアもなければ隣との仕切りも

ない。日本人と分かると興味と敵意の人垣に取り囲まれる。商店では釣銭を投げ返される。サービスという概念は無い。百貨店にある商品は自転車だけ。現在は超高層ビルが立ち並ぶ上海・浦東地区は田園地帯、現在の浦東開発銀行の建物は上海市革命委員会であった。この国が貧困と計画経済の呪縛から脱却し、経済大国になるとは夢にも思わなかった。

真夏の上海は想像以上に手強い。この訪中団の学生 14 人の半数は現地で B 型肝炎を発症して入院し、任務遂行不可能となった。ところが私はなにごともなく南京、北京、河北省と三週間の交流をこなし、各地で熱烈歓迎され、地方紙にも載って能天気な舞い上がっていた。

帰国数日前に復旦大学経済学部の学生と討論会をした。中国の学生は当然マルクス経済学を勉強していると思いこんでいた私が聞きかじりのマル経用語で質問すると、そんな理論は初めて聞いたといわれる。どうも話がかみ合わない。何かヘンだなと思いながら図書館へ案内されて疑問が氷解した。同時に戦慄を覚えて背筋が凍った。書庫にはミルトン・フリードマンやポール・サミュエルソンなどアメリカの経済学の教科書と中国語訳がずらりと並んでいた。フリードマンが日本に広く紹介されるかなり前の話である。「米帝国主義は張子の虎」(毛沢東)のはずだったのに？ なにごとも現場で自分の目で見なければ何も分からないのだ。このことは新聞記者になり、そのご研究者になってもずっと肝に銘じている。

日本の大学が沈滞している間に、中国の大学をシカゴ学派が席卷し、マルクスも毛沢東もゴミ箱に捨てられた(習近平政権になって復活の兆しはあるが)。現在、中国の若手学者はグローバリズムを礼賛している。なんというプラグマティズム。実利的で長期的な国家戦略。政治的立場の違いは棚上げして、米国のパワーを評価し、その学問を学び、追いつこうという強烈な意志。個人主義的で競争を是とする中国社会は、競争を美德とする米国立市場主義と非常に相性が良い。しかし、これが極端な格差社会を生み出している。

今にして思うと、復旦大学にあったフリードマンの教科書は米国からの寄贈であったのであろう。米国は中国に経済思想を輸出することでエリート層の思想を改造し、将来の巨大市場を確保しようとしたのである。もともと中国の一流大学は、清朝末期の義和団事件の賠償金をもとに米国が設立したものが多い。米国の経済思想は中国の底流に流れている<sup>25</sup>。

25 ジョークのような話だが、現在の中国では正統派マルクス経済学を学ぶために米国のマサチューセッツ州立大学(MITではない)へ留学する例が多い。

### 3章 経団連が宇沢思想に帰依？

---

2021年12月23日、帝国ホテルで開かれた日本経済新聞社・テレビ東京主催の朝食会に参加した。この会はパンデミック以前には年末エコノミスト懇親会と称して盛大に行われていたものだ。この日は冒頭の15分で岸田文雄総理が看板政策の「新しい資本主義」を淡々と説明した。次に財界総理の十倉雅和・経団連会長（住友化学会長）が登壇した。通常、財界幹部のスピーチは陳腐で退屈なことが多い。この日も何も期待していなかった。会長のスピーチはいつものように事務方が作成したパワポ通りに進行した。聴衆は定石どおりの展開に安心して集中力を下げ、眠気が会場を支配し始めたところに、突然、「サステナブルな資本主義の確立・・・宇沢先生は・・・ロールズは・・・」と十倉会長は話し始めた。

なにがとてか、とパワポをみると、大きな活字で「宇沢弘文」、「社会的共通資本」の文字が躍っている。経団連は「サステナブルな資本主義の確立に向けて」宇沢の「社会的共通資本」とロールズの「正義論」を土台に据えるというのである。財界首脳が公的な場で「宇沢弘文」を称賛した歴史的瞬間であった。ベテラン記者は目を疑い、内心ではのけぞったに違いない。

おもえば、宇沢は財界にとって天敵であり、厳しい教師であった。『自動車の社会的費用』（岩波新書、1974年）で言論界にデビューして以来、利潤追求だけに走る営利企業と無責任な政府を徹底的に批判してきた。水俣病問題では企業と国に賠償責任を問い、成田空港問題では農民側に立って紛争を調停した。そうした宇沢の言動を知る者にとっては、資本主義のエスタブリッシュメントが宇沢理論に「転向」したことは驚天動地のできごとである。それだけ財界の保守本流は追い詰められているともいえるだろう。

財界総理が宇沢に帰依することにしたのはなぜか。背景にあるのは、過去20年余り、市場原理主義的な企業戦略をとってきたにもかかわらず、日本企業も日本経済全体も没落したことへの反省である。90年代には世界をリードした半導体、時価総額で世界ランキング上位を独占した銀行、粗鋼生産で首位にあった鉄鋼業などは今や見る影もない。マクロ的に見ても日本のGDP（国内総生産）は過去20年間でほぼゼロ成長である。実質賃金も低下を続け、韓国を下回るようになった。こうした日本経済の敗北を財界がようやく自覚するに至ったことはひとつの画期である。

デフレ経済下で財界、とくに経団連は存在意義を問われてきた。大企業の相次ぐ不祥事と業績低迷のうえに、めぼしい政策もなく、ひたすら賃上げに反対する姿勢は社会の反感

を買っていた。トヨタ自動車を例外として日本の財界主流企業は没落した。経団連は重厚長大企業の高齢男性経営者による叙勲のための互助団体と揶揄されるまでになっていた。一方で過激な市場原理主義を信奉する楽天のような勢いのある IT 企業群はすでに経団連を脱退するなど組織力の低下が目立っていた。このため起死回生の新機軸を打ち出す必要に迫られていた。会場で配布された十倉会長の経歴によると、1974年東大経済学部卒とある。宇沢が米国から帰国して東大に赴任したのが1968年であるからなんらかの接点があるはずだ<sup>26</sup>。

### 【個人史のエピソード】

私の恩師の高橋毅夫先生（1924-1992）から聞いたエピソードである。官庁エコノミストであった高橋先生は経済企画庁経済研究所長の傍ら早稲田大学で講師をされていた。そこ、連合総研所長を務めた後、新潟大学経済学部へ赴任され、短期間だが東大退任後の宇沢と同僚であった。ある日、楽しそうに言われた。

— 昨日の教授会でたまたま宇沢さんの隣に座ったんだよ。どうされてたと思う？

ずっとノートに難しい数式を計算されていたんだよ<sup>27</sup>。

## 4章 経団連による宇沢解釈の誤り

前章でみたように、日本の旧来型エスタブリッシュメントが政策理念として宇沢思想を標榜したことの意味は大きい。これをきっかけに宇沢思想がふたたび各界で議論される可能

26 『資本主義と闘った男』の著者佐々木実氏が十倉会長にインタビューしている

— ご自身は住友化学というグローバル企業の経営者。新自由主義とは親和性があったのでは？

十倉 1998年3月にベルギー駐在から帰国した当時、「グローバリゼーション」の真ただ中だった。住友化学も国際化を掲げ、シェアホルダーズ・バリュー（株主価値）の向上を目指した時期だった。できるだけ市場原理に委ねて競争しようと。その頃は、私も新自由主義にかぶれていた。（週刊エコノミスト オンライン版 資本主義の転換点に：十倉雅和 経団連会長 宇沢先生の「社会的共通資本」に学ぶ 企業活動に“社会性”を取り戻す | 週刊エコノミスト Online (mainichi.jp)）

27 新潟大学時代の宇沢の生活については新潟大学名誉教授の藤井隆至氏が回想している。

「おとうさん、きょうサンタさん見たよ！」夕食のとき、小学校一年の娘が高揚した口調で話しかけてきた。「サンタさん」とはもちろん宇沢弘文先生のこと。学校から帰る途中で、先生が走っているところを発見したという。先生が、地元の子どもたちから「サンタさん」と呼ばれていた理由は説明不要のはず。重厚な白ひげと軽快なジョギング姿、そのアンバランスな組み合わせは子どもたちに強い印象を与え、先生は小学生のあいだで話題の中心人物になっていた。雨が降りそうなときは、こうもり傘を片手に走っておられた。

性がある。

しかし、経団連の宇沢思想解釈には致命的な誤りがある。十倉会長の講演で配布された資料によると、経団連は「新しい資本主義」の実現に向けた問題意識と称して、次のようなステップを構想している<sup>28</sup>。パワポ資料からそのまま引用すると、

- ① 我々の経済活動は資本主義が前提であり、「成長」が重要
- ② そのために、取り組むべき課題は「社会的共通資本の構築」
- ③ 社会的共通資本の構築は、市場経済だけでは解決できない。政府の役割が重要に。

ひとつ目の問題点は、経団連が依然として成長を最大の目標としていることと宇沢理論との整合性である。前述のカール・シュルによるインタビューの中で宇沢は、経済システムのあるべき姿としてジョン・スチュアート・ミルの「定常状態」(stationary state)を明確に支持している。宇沢の解釈によるミルの定常状態とは、GDPなどマクロ経済変数が一定の均衡水準を保ちながら経済システムの中で活発な新陳代謝が行われ、しかも自然環境が持続可能に保たれる状態である。宇沢は自らの学問の上に立って定常状態が望ましく、また実現可能であることを確信しているのである。一方で経団連の思想は旧態依然とした成長重視のままで宇沢思想とは根本的に相いれない。

二つ目の問題点は、経団連が成長の手段として「社会的共通資本の構築」を掲げていることである。しかし、宇沢の主張は定常状態の実現のための「社会的共通資本」なのである。

三つ目の問題点は、これまで新自由主義を信奉して自然環境など社会的共通資本を毀損してきた企業が、謙虚な反省をしないままにインフラストラクチャーの構築を政府に丸投げしているように見えることである。政府の負担は結局、国民の負担になる。

以上のように、経団連の政策と宇沢思想には大きな齟齬がある。あるいは、経団連は意図的に宇沢思想を誤読しているのではないかと疑われる。経団連は宇沢の令名を利用して自らのスタンスを権威化し、実質的には宇沢理論を換骨奪胎しているのではないか。

## 5章 「社会的共通資本」再考

---

宇沢は四つの敵と闘ってきた。まずは、かつて宇沢自身が頂点を極めた新古典派経済学

---

28 shiryu6-2.pdf (cas. go.jp)

である。もうひとつは、フリードマン的な市場原理主義である。三つ目は、岩盤のように保守的で変化を嫌う日本の政治と財界である。四つ目は日本の一般人の知的風土である。宇沢は四正面と戦わざるを得なかった。

宇沢は英雄的に孤軍奮闘した。その社会活動は世間からは敬意をもって見守られ、著作も広範に読まれた。しかし、2014年の没後は語られることは次第に少なくなった。理論家としてあるいは実践家として宇沢の衣鉢を継ぐ者は決して多くはない。

経済学界においては敬して遠ざけられた。なぜなら社会的共通資本を研究して論文を書くことは非常に難しいからだ。経済学の枠を超えてしまっているのに、掲載してくれる専門誌がないのだ。論文を査読できるレフリーもほとんど見つからない。このため研究ポストを獲得するために論文数を稼がなくてはならない若手研究者にとって宇沢理論は鬼門となってしまった。

現状では専門家も一般社会も宇沢思想を理解しているとは考えられない。つまり、人々を鼓舞する対抗理論としての強さを発揮しているとは言い難い。それはなぜか。ひとつは、宇沢の問題意識が時代を先取りしすぎていることである。宇沢が地球温暖化に対して警鐘を鳴らしたのは1990年ごろからである。公害問題で培った研究と実践の延長線上に地球温暖化が視野に入ってきたのであろう。逆説的ではあるが、今や宇沢の警告はすでに地球規模で一般常識となり、ことさらに宇沢の功績を思い出すことがなくなったと考えるべきであろうか。時代がようやく宇沢に追いついたといえよう。

二つ目は宇沢がフリードマン思想への代替策として提示した倫理的経済学が、美しい寓話のような扱いを受け、現実的な議論が進まなかったことである。宇沢が自信をもって世の中に問いかけた「社会的共通資本」論に対する賛同者が少なかったことは予想外であり、落胆を隠すことができなかった。2003年に同志社大学に社会的共通資本研究センターが設立され、宇沢が所長に就いた。しかし、若い後継者を育てることはできなかった<sup>29</sup>。

また、前章でみた経団連による意図的な誤読にみられるように宇沢のネームヴァリューだけを利用しようという動きがあるように正しく定着しているとはいえない。

あらためて宇沢による社会的共通資本の定義を振り返ると次の通りである。

「社会的共通資本は、一つの国ないし特定の地域に住むすべての人々が、ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持することを可能にするような社会的装置を意味する（『社会的共通資本』岩波新書）」

これを一読した限りでは抽象的であり、具体的なイメージがわきにくい、持続可能な社会を実現するための何らかの社会的デザインであるがうかがえる。宇沢自身が平易に解

29 宇沢の最後の弟子の世代では、宮川努・学習院大学教授が宇沢理論の復興を目指している。

説している部分を引用する。

「具体的にはまず、土地、大気、海洋、河川、森林、水、土壌といった自然資源がある。二つ目は社会的インフラストラクチャーである。日本では普通、社会資本と言っているが、公共的な交通機関、上下水道、電力・ガス、道路、通信施設などがこれに該当する。三番目として、教育、医療、金融、司法、行政など制度資本と言われるものがある。社会を円滑に機能させ、一人ひとりの人間的な尊厳を守るために必要な制度で、中でも重要なのが教育と医療である。これらの管理は社会的な基準で行われる。それぞれの分野の職業的専門家によって専門的知見に基づき、職業的規律によって管理・運営される」

ここに書かれていることはまったくの正論である。しかし、残念ながら既視感がある。宇沢が社会的共通資本を高々と掲げた時、職業的な経済学者からは当惑と異端視で迎えられた。なぜなら、社会的共通資本の中身が従来の公共経済学の「公共財」の概念とほとんど同じで二番煎じに思われたからである。宇沢ほどの大家がいまさら何を言い出したのか、と不審に思う声が出たほどだ。宇沢はそれを意に介さず、現実の問題に深くコミットしていったが、そこには孤高の影があったという。

## おわりに 個人史の中の宇沢弘文とフリードマン

---

私にとって宇沢弘文は仰ぎ見る存在であった。社会的公正と社会的弱者に対して深く配慮する宇沢の著書に啓発された。経済新聞の記者でありながら、企業に対して客観的なスタンスと適度なディスタンスを保つことを自己に課してきた。宇沢の弟子たちの宇沢談義を聞き、エコノミストの集まりで遠くに宇沢を見ることはあっても直接取材をする機会はなかった。このことは心残りである。

一方、ミルトン・フリードマンに対しては一部の人々が嫌悪するような感情はもっていない。フリードマンの極端な政治的ポジションを抜きにして考えると、彼の思想は単純明快で庶民にわかりやすく、意外にも論理的ですらある。米国建国以来の競争と自助努力を美德とする倫理観の自然な発展のように思われるからだ。

私自身はフリードマンに代表される市場原理主義とは非常に遠いところにいる。宇沢とフリードマンが正反対のベクトルを持っているとすれば、私ははっきりと宇沢のベクトルを支持している。にもかかわらず、フリードマンの極端な政治的言動は別にして、フリードマン思想自体を貧困や格差の温床として呪詛することはない。それどころか個人の勤勉と競争への参加を美德とするアメリカ合衆国建国以来の経済思想の発展系として、筋の通

った単純な構造に敬意を表してもいる。1980年に初めて『選択の自由』を読んだ時には、官僚による規制に縛られて身動きできなくなった日本社会に風穴をあける手引きのように思えた。

この意識は、コーネル大学のピーター・マックレランド先生の米国経済思想史演習で強くなった。米国建国以来の勤勉と競争への参加を美德とする労働倫理、個人の尊厳と自由を至上とする価値観の形成など米国史のグラスルーツを学んだ。

米国だけでなく世界各地にフリードマン主義者がいるのはその単純明快さに共感するからである。インテリからは蔑視され、反知性主義者とさげすまれても彼らは生活信条としてフリードマン主義を選び取る。注意しなければならないのはフリードマン思想が新奇な思想ではなく、17世紀の社会の古層が色濃く、今なおきわめて宗教色の強い米国社会においてはほとんど土着の思想に近い点である。共和党やトランプを支持する米国の半数の人たちは決して愚民ではない。フリードマン思想は自明のことを彼らに再確認させてくれるご託宣である。彼らの中には、ケインズ思想は20世紀に英国人がもたらした新奇の思想であり、当時も今も一種のコミュニズムだと信じている人が少なからずいる。

問題はフリードマン思想が彼自身の言動とも相まって、異常に肥大した形で拡大解釈、デフォルメされ、利害関係者によって恣意的に利用されてきた点である。同時に、かつては対抗軸として存在したりベラリズムの急激な衰退がフリードマン思想の浸透を許してきたという点にある。

リベラリズムはフリードマン主義に対しても、世界で台頭する独裁者や権威主義に対しても対抗力を失っている。リベラリズムの上質の思想はなぜ伝わらなくなったのか。この問題は本稿の枠を大きく超えるが、リベラル派自体が高慢になり、国民・市民の大多数と遊離し始めたことは否めない。対立する思想を呪い、敵対する相手を愚民とものしるだけではだけでは何も生まれない。リベラル派は自らの弱さと高慢さを見つめなおし、再生に向けて動き出さないと、世界は行き過ぎた市場原理主義と権威主義体制に支配されてしまうであろう。対抗思想の手掛かりとして宇沢思想は今でも有効である。ただし、美しい寓話としてではなく、具体化し実践していく知恵と戦略と行動力が求められる。

(本稿の作成にあたって東京外国語大学の岩崎稔先生から多くの助言をいただいた。記して感謝申し上げます)

本稿は国学院大学派遣研究員制度（令和元年度）の研究成果である。

#### 参考文献

宇沢弘文『自動車の社会的費用』岩波新書 1974年

- 宇沢弘文『近代経済学の再検討』岩波新書 1977年  
宇沢弘文『社会的共通資本』岩波新書 2000年  
宇沢弘文『ケインズ「一般理論」を読む』岩波現代文庫 2008年  
宇沢弘文『経済学は人びとを幸福にできるか』東洋経済新報社 2013年  
宇沢弘文『経済と人間の旅』日本経済新聞出版 2014年  
佐々木実『資本主義と闘った男』講談社 2019年  
藤本龍児『ポストアメリカニズムの世紀』筑摩選書 2021年

*AN INTERVIEW WITH HIROFUMI UZAWA* Masahiro Okuno-Fujiwara, Karl Shell Published online by Cambridge University Press: 01 June 2009, pp. 390-420 *Macroeconomic Dynamics*: Volume 13-Issue 3 | Cambridge Core

*The American Search for Economic Justice*, Peter D. MacClelland, Basi Blackwell Inc. 1990